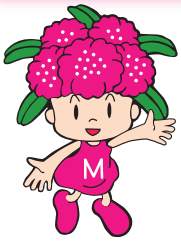
7　宇美の開発

（1）6代目小林作五郎

小林作五郎

①水に困っていた宇美

宇美の先人の働きや開発への工夫や努力について調べてみましょう。



宇美は，宇美川に流れ込む仲山川や井野川が急な谷あいを走っています。そのため，多量の雨が降れば土砂が田畑を押し流し，日照りが少し続いただけで田に引く水がなくて困るありさまでした。

1873年（明治6年），この年は，ひどいかんばつで雨が降らず，稲が枯れて，米ができませんでした。畑の作物も枯れてしまいました。農民の生活はとても苦しくなり，それが原因で福岡の農民30万人が福岡県庁に押しかけるという筑前竹やり一揆が起こりました。

このとき，宇美で酒屋をしていた小林作五郎は，まだ18歳でしたが，「農民が安心して米づくりができるようにしなければならない。」と考えました。

稲が枯れた田で相談する農民たち

小林作五郎

作五郎は，江戸時代の終わりごろ生まれました。9歳のときには，宇美から隣の乙金村（今の大野城市）の高原謙次郎という人の家まで，毎日読み書きの勉強に行きました。

1874年（明治7年），作五郎は，宇美村の村長のような役（保長）をすることになりました。

昔の宇美村の地図

中の原池ふきんの土地の高低図

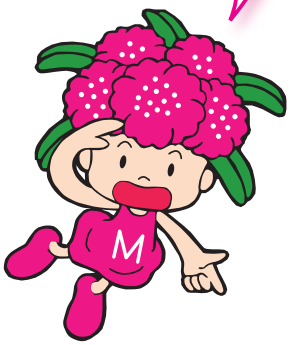
②池をつくることを決心した作五郎

1884年（明治17年），29歳になった作五郎は，宇美を住みよい村にし，産業を盛んにするには，大きなため池をつくり，農民が安心して米づくりができるようにしなければならないと考えました。障子岳の上の原や中の原，山ノ内の田んぼは，鎌ヶ谷池から用水路を引いていたのですが，池が小さいためほとんど役に立っていませんでした。

地図を見て，粘土で宇美町の地形図を立体的につくってみましょう。

雨が降ってほしいという願いを込めて村では雨ごいの行事をしました。ツバキの葉やわらでつくった５メートルもある龍を大勢の村人がかついで「りょうりょうまいまい。りょうりょうまいまい。」と掛け声をかけながら，たいまつを片手に山の中腹にある池まで行きました。こうした雨ごいがあちこちの山々で夜も昼も続けられました。しかし，村人たちがいくら心を込めて雨ごいをしても思うように雨は降りませんでした。

わらで作った「りゅう」を池につけて雨が降るように雨ごいをした人たちの生活のようすを想像してみましょう。



雨乞い（年中行事図鑑）

「池を大きくするしかない！」と考えた作五郎は，自分の田んぼをつぶして池にできないか土木技師の松永和助に相談しました。

作五郎は，宇美村の人のために，どのような願いをもっていたのか話し合ってみましょう。

すると，和助は，「鎌ヶ谷池の４倍もの大池ねえ。そのためには，たくさんの人夫に，お金が・・・。」と言いながら計算した紙を作五郎にわたしました。1884年（明治17年）２月のことでした。

この計画書に作五郎は，驚いてしまいましたが，早速人集めやお金の相談に回りました。

ところが，「自分の家のくらしにも困っているというのに，工事の金なぞ出されん。」などと，だれからも追い返される始末でした。

困り果てた作五郎は，ある夜，家族を集めて言いました。

和助がつくった計画書

つぶれる田んぼ	440.9坪（1455㎡）
人夫（働く人）	880人（１日あたり）
人夫の賃金	
大　工	25銭（１日）
きこり	20銭（１日）
地つき	25銭（１日）

池をつくろうとした作五郎の思いや願いを新聞などに表してみましょう。

新聞のまとめ方のポイント

- いつ，どこで，だれが，なぜ，どのように，を記事の柱にしよう。
- 結論を先に，そしてくわしい説明を後に書こう。
- 調べた事実と自分の考えや感想は分けて書こう。

※「正確さ」と「わかりやすさ」が大切です。

「わたしは，宇美のみんなのために池をつくりたいのだが，村の人はなかなか賛成してくれん。しかし，みんなくらしに困っとるのだ。だからこそ，安心して米がつくられるように大きな池をつくらにゃならん。お金は全部わたしが出そうと思う。村のくらしが良くなるためなら，この小林家の財産がのうなってもよか。」

４歳と３歳の二人の男の子を両わきに抱えた妻のトミが

「あなたが正しいと思うとります。心配せんで，思うたごとやってください。」と静かな声で答えました。

明治の初めのころの宇美（馬場「萬代」前）

③300町歩の田畑を潤す中の原池

高い賃金を出すと聞いた宇美の村人はもちろん，須恵や志免の村々からも働く人が８８０人集まり，寝泊まりする小屋も建ちました。1884年（明治17年）３月，いよいよ池づくりが始まりました。

地つきの人たちが，和助に教えられた山に入って，土を掘り始めました。

今のような全てが金属でできたスコップはなく，持つ部分は木で，先の部分だけが金属でできた「くわ」や「すき」しかありませんでした。運ぶ道具は「もっこ」といって，麻縄やわらを編んだ入れ物でした。

１町は約１ｈａで，300町歩は，ヤフオクドーム（約7ｈａ）42個分の広さがあります。

もっこで土を運んでいるところ

もっこ

これに土を乗せて，「てんびんぼう」で肩にかついで，運ぶのです。

近くの山から，工事現場まで，「もっこ」をかついでくるのです。運んできたら，和助の指示どおりに，「もっこ」をひっくり返して，土を置きます。置いた土を今度は「さんひょうづき」でつき固めていくのです。「さんひょうづき」というのは大きな石に綱をかけて一斉に持ち上げて，土を固める道具です。こうして，池の周りの１５０メートルの堤防は，『はがねづち』といって，コンクリートのように固くかためられていきました。

さんひょうづきで赤土を固めているところ

さんひょうづき

３月の終わりごろから，「なたねづゆ」といって，雨が降り続く日が続きました。雨は，せっかく積み上げた土を流してしまいます。それに，流れ出した土が，上の原の田んぼを覆い尽くしたので，上の原の農家の人たちは，かんかんに怒って作五郎にくってかかりました。

「おれたちを，助けるようなことを言っとったくせに，逆におれたちを困らせとるじゃないか。」

作五郎は，みんなに頭を下げて謝りました。そして，「悪うございました。でも，みなさん，間違いなくみなさんのお役に立つ池をつくってみせます。見とってください。」と，頼むのでした。

採り入れの済んだ田んぼに，木枯らしが吹き，寒い冬がやってきました。このころになると，堤防の高さも人の高さの３倍をこしていました。もう，ひと息です。白い息を吐きながら，かじかむ手足を奮い立たせて，人々は

「よっさ。ほいさ。」ともっこを運んでいきます。

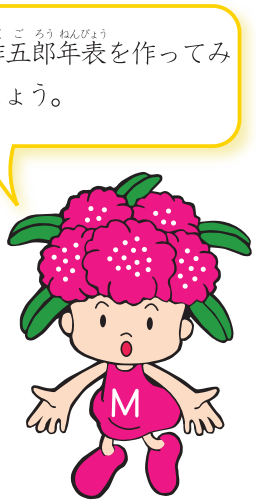
　何か月も工事をやっているので，赤土を掘る木ぐわやすきが，何度も傷んだり，折れたりしていました。そのたびに，作五郎は，道具置き場を指差して，「新しい道具を使ってください。寒い中，みなさん，本当にご苦労様です。」と励まして回りました。

工事をする人々

池の工事を始めて，１年と１か月。高さ８ｍ，長さ150ｍの堤防も，もうすぐ完成です。

翌1885年（明治18年）４月，中の原池はできあがりました。

こうして，日照りのときに水の心配をしないで，安心して米つくりに励むことができるようになりました。そして今も，300町歩の田畑を潤しているのです。

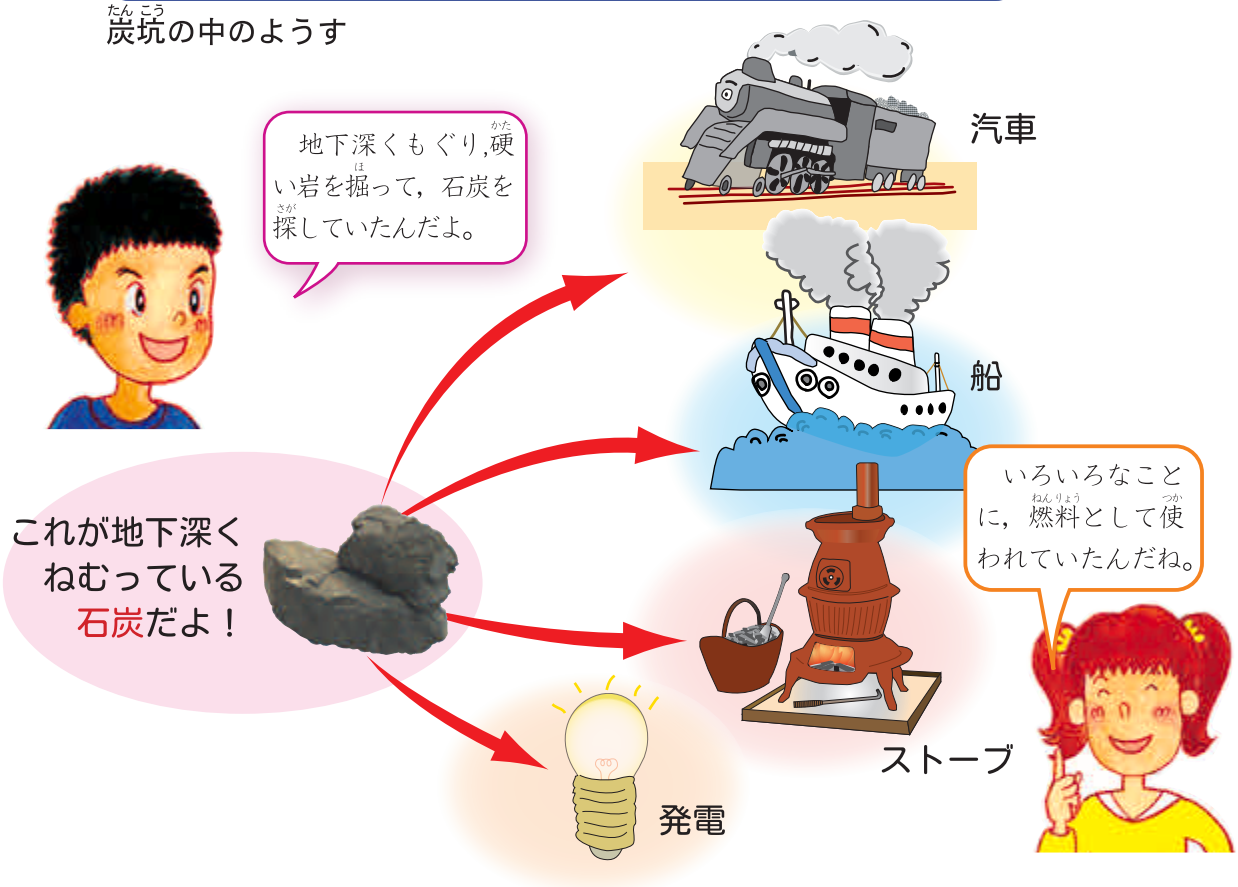


現在の中の原池

現在の障子岳の田んぼ

(2) 石炭でにぎわった宇美町

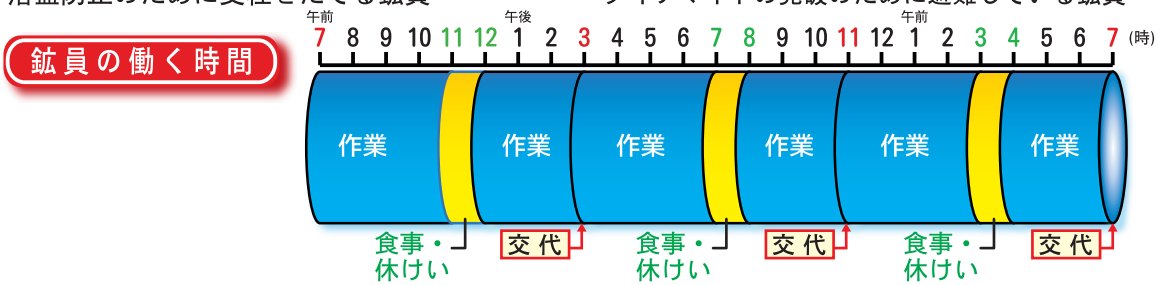
炭坑の中のようす



①炭坑で働いていた人々

落盤防止のために支柱をたてる鉱員

ダイナマイトの発破のために避難している鉱員



三菱勝田鉱業所は，今の桜原小学校にあって，１日３交代で３５０ｍの地下から石炭を掘っていました。危険な仕事のため，坑内に入る前に人数と名前を確かめ，ヘルメットにキャップランプを付け，一班十数人のグループで自分の持ち場までエレベーターで降りて行きます。食事は，坑内でとるので，弁当と水筒も持って行きました。仕事が終わると，顔も体も真っ黒になるので，そのまま鉱員浴場へ行き，１日の汚れや疲れをとったそうです。

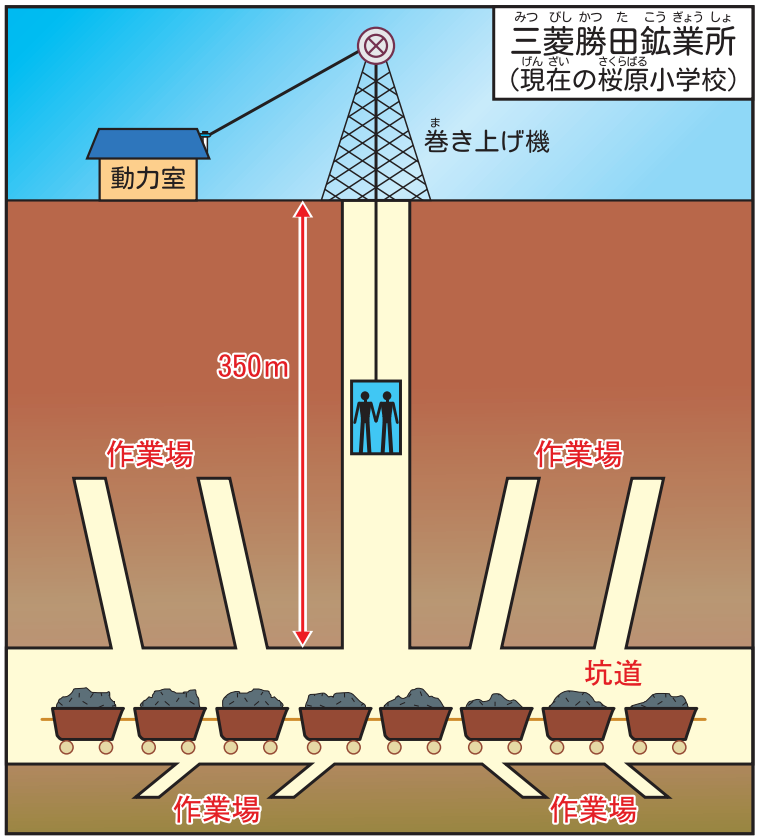
炭坑で働く人は，作業服や坑内鉄帽などで危険から身を守りました。

機械がない時代は，つるはしを持ち，手で掘り始めました。掘った石炭は，トロッコに積み，地上へと運び出しました。地下は，真っ暗で蒸し暑く空気も悪かったようですが，人々は汗だくになり一生懸命掘りました。

＜炭坑で使った道具＞

どのように使ったか，調べてみましょう。

②坑道のようす



〔巻き上げ機〕
昭和13年に完成したこの巻き上げ機は，当時東洋一と言われました。

〔坑口（坑道の入口）〕
この入口から，人やトロッコが出たり入ったりしました。このような入口が宇美町にはたくさんありました。

〔トロッコ〕
とれた石炭は，斜坑からトロッコを使って選炭場に運ばれました。

地下350mまで縦穴を掘り，エレベーターを取り付けました。次に大きな坑道を横に掘って，そこからたくさんの小さな坑道を掘って石炭を採っていました。

坑道には，数ｋｍにおよぶ長いものもありました。

そして，坑道の中には，水飲み場や休憩所，資材置き場もあり，とても広かったそうです。

③選炭場のようす

選炭場

ランキョ汽車

ボタ山の風景

石炭は，固い岩を削岩機で掘ったり，ダイナマイトで崩したりして掘り出されました。掘り出された石炭は，坑内でつるはしを使って砕かれ，ボタといっしょにトロッコやベルトコンベアで選炭場に運ばれました。

左上の写真は，選炭場のようすです。選炭場では，ベルトコンベアで運ばれてくる物の中から質の悪い石炭や混じってきた岩石を取り除きました。この取り除いたものを捨てた場所がボタ山になりました。

昭和25年ごろ，石炭を，香椎線と勝田線に積み込むために，会社が引き込み線をつくって運んでいたんだよ。今，し～ず・うみがある所まで線路があったんだよ。

昭和25年ごろの宇美町のようす

石炭を運ぶために，香椎線と勝田線を利用したんだよ。当時は，人も石炭もいっしょには運んだため，途中の駅で石炭を積み込む間，人々はじーっと待っていたんだって！そして，石炭は港まで運ばれたんだよ。石炭はとても大切にされていたんだね。

④石炭でにぎわった宇美町

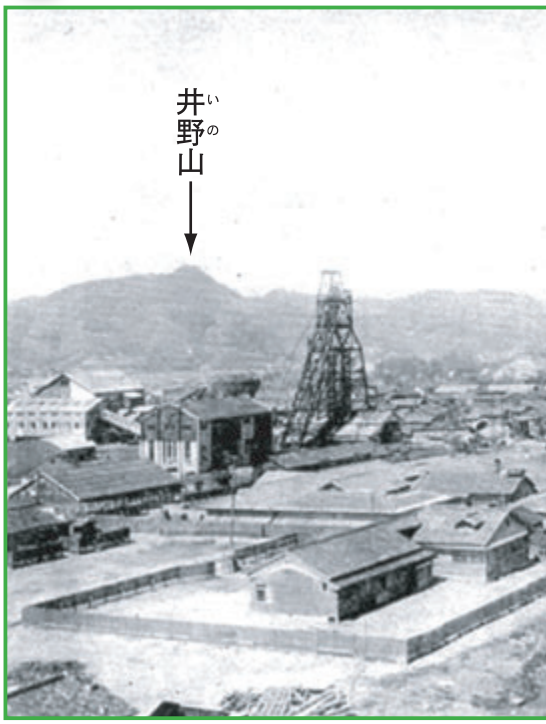
桜原校区にあった炭坑住宅

炭坑で働く人には，会社が無料で家を貸してくれました。電気代や水道代も無料でした。

鉱員浴場

石炭で汚れた体を洗っていました。鉱業所で働いている人や家族は，無料で使ってよかったそうです。だからみんなが利用しやすく，地域の社交場になっていました。

三菱勝田鉱業所全景



勝田子どもプール（現　桜原区神武病院付近）
（昭和 33 年ごろ）

働いている人の子どものために，会社がつくったプールです。大きなプールで子どもたちも元気に泳いでいました。

宇美町の風景

現在のゆりが丘付近です。炭坑で働く人のための病院や住宅などさまざまな建物がありました。

（写真中央は三菱勝田病院）

三菱勝田病院

当時にしてはりっぱな建物で，たくさんのお医者さんや看護婦さんが，炭坑でけがをした人や病気になった人を助けてくれました。

洋服や日用品，食料品などほとんどの物はそろっていましたので，今のスーパーマーケットのように，たくさんの人が利用していました。

購売店のようす

当時の事故を伝える新聞

⑤炭坑災害

石炭を掘っていくと，たくさんの地下水が出ます。水没しないようにポンプで地上に水をくみ出さないといけません。その水と石炭を洗う水が宇美の川を真っ黒にしました。

また，坑内では，坑道で発生するガスや石炭のちりによる爆発事故で多くの人が亡くなり，肺の病気になる人もいました。

1955年（昭和30年）以降は，燃料として石油が多く使われるようになり，石炭を掘る会社が倒産，炭坑が次々に閉山し，町の人口も少なくなりました。

炭坑事故でたくさんの人がけがをしたり，亡くなったりしたんだね。
危険な仕事だったから，苦労もたくさんあっただろうね。

炭坑で亡くなられた方を弔う慰霊碑

宇美町の主な炭坑事故

年	月	災害		
明治40	2	日の丸炭坑ガス爆発	死傷者／　5名	
明治41	12	日の丸炭坑ガス爆発	死傷者／　5名	
昭和 7	11	昭和炭坑ガスたんじん爆発	死　者／　5名	
昭和11	6	大正鉱業所ガスたんじん爆発	死　者／34名	負傷者／28名
昭和19	6	亀山井野炭坑火災ガス爆発	死　者／23名	重傷者／　1名
昭和23	6	三菱勝田炭坑ガス爆発	死　者／62名	重軽傷者／8名
昭和29	11	武内炭坑ガス爆発	死　者／12名	
昭和30	9	日の丸炭坑ガス爆発	死　者／　9名	負傷者／　6名

⑥ボタ山や炭坑のあと利用

宇美町は，ボタ山あとに工業団地をつくり，福岡市などから20以上の新しい工場を誘致しました。

また，炭坑災害で家が傾いたり，田畑に穴があいたりした所の復旧工事をしました。町をあげての新しいまちづくりが行われています。

桜原小学校（勝田炭鉱あと）

早見工業団地（ボタ山あと）

宇美商業高校（ボタ山あと）